

【旧約聖書日課】列王記下 2章1～15節

¹主が嵐を起こしてエリヤを天に上げられたときのことである。エリヤはエリシャを連れてギルガルを出た。²エリヤはエリシャに、「主はわたしをベテルにまでお遣わしになるが、あなたはここにとどまっていなさい」と言った。しかしエリシャは、「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません」と答えたので、二人はベテルに下って行った。³ベテルの預言者の仲間たちがエリシャのもとに出て来て、「主が今日、あなたの主人をあなたから取り去ろうとなさっているのを知っていますか」と問うと、エリシャは、「わたしも知っています。黙っていてください」と答えた。⁴エリヤは、「エリシャよ、主はわたしをエリコへお遣わしになるが、あなたはここにとどまっていなさい」と言った。しかしエリシャは、「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません」と答えたので、二人はエリコに来た。⁵エリコの預言者の仲間たちがエリシャに近づいて、「主が今日、あなたの主人をあなたから取り去ろうとなさっているのを知っていますか」と問うと、エリシャは、「わたしも知っています。黙っていてください」と答えた。⁶エリヤはエリシャに、「主はわたしをヨルダンへお遣わしになるが、あなたはここにとどまっていなさい」と言った。しかしエリシャは、「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません」と答えたので、彼らは二人で出かけて行った。⁷預言者の仲間五十人もついて行った。彼らは、ヨルダンのほとりに立ち止まったエリヤとエリシャを前にして、遠く離れて立ち止まった。⁸エリヤが外套を脱いで丸め、それで水を打つと、水が左右に分かれたので、彼ら二人は乾いた土の上を渡って行った。⁹渡り終わると、エリヤはエリシャに言った。「わたしがあなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何をしようか。何なりと願いなさい。」エリシャは、「あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせてください」と言った。¹⁰エリヤは言った。「あなたはむずかしい願いをする。わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない。」¹¹彼らが話しながら歩き続けていると、見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上って行った。¹²エリシャはこれを見て、「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と叫んだが、もうエリヤは見えなかった。エリシャは自分の衣をつかんで二つに引き裂いた。¹³エリヤの着ていた外套が落ちて来たので、彼はそれを拾い、ヨルダンの岸辺に引き返して立ち、¹⁴落ちて来たエリヤの外套を取って、それで水を打ち、「エリヤの神、主はどこにおられますか」と言った。エリシャが水を打つと、水は左右に分かれ、彼は渡ることができた。¹⁵エリコの預言者の仲間たちは目の前で彼を見て、「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている」と言い、彼を迎えに行き、その前で地にひれ伏した。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 7章32～39節

³²ファリサイ派の人々は、群衆がイエスについてこのようにささやいているのを耳にした。祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを捕らえるために下役たちを遣わした。³³そこで、イエスは言われた。「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。³⁴あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない。」³⁵すると、ユダヤ人たちが互いに言った。「わたしたちが見つけることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行って、ギリシア人に教えるともいうのか。³⁶『あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない』と彼は言ったが、その言葉はどういう意味なのか。』」

³⁷祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。³⁸わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」³⁹イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている“霊”について言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、“霊”がまだ降っていなかったからである。

天に上げられる【こども説教のために】

ご復活されてから40日目、弟子たちが見守る中、主イエスは天に上げられました。そこで弟子たちは、主イエスに言われた通り、祈りながら待つことにしました。主イエスが約束くださった「聖霊」が降るのを待ったのです。

主イエスが天に昇られるより何百年も前、一人の預言者が天に昇っていくのを見たという人たちがいました。天に昇ったのはエリヤという預言者です。エリヤには一人の弟子がいました。エリシャという弟子です。エリヤは、自分が天に上げられるときが来たことを知って、エリシャに別れを告げましたが、エリシャはどこまでもついて来ようとしてきました。最後にエリヤは、「わたしがあなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何をしようか」とエリシャに問いました。エリシャが「あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせてください」と願うと、エリヤは答えました。「わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる」。エリヤの霊を受け継がせてもらえると知ったエリシャは、エリヤが天に上げられていくのを見届けました。すると、エリシャにはエリヤの霊がとどまったのです。

弟子たちは、天に昇られる主イエスから聖霊を受け継がせていただくのです。わたしたちも、同じ聖霊を受け継がせていただくのです。

受け継ぐ

先週、一人の高齢教会員の訃報をいただきました。前任牧師のご母堂でもある K 姉で、遠方の施設に入居されていたので、長く石神井教会には出席されていませんでした。ご葬儀はご家族親族のみで執り行われるとのことで、皆さんには逝去のお知らせをさせていただきたくとなりました。

わたしは牧師として、礼拝の中で皆さんに教会員や関係者の訃報をできるだけお伝えするようにしてきました。殊に最近、そうするように心がけています。世の中の考えが急激に変化する中、よく知る方が亡くなられた場合でも、皆さんとご一緒に葬儀を営むことが少なくなっているからです。そのことに危機感も抱いています。

もちろん、現代社会に生きるわたしたちは、医療や福祉の専門家の手によって十分丁寧な看取りをしてもらえることでしょう。葬儀業者の手によって、遺族の希望と予算に見合った葬儀も手配してもらえることでしょう。もはや宗教者の出番は無い、とさえ多くの人が考えているかもしれません。昔のように親族や近所の者、あるいは教会のような宗教関係者に総出で関わってもらわなくても、愛する家族を見送ることはできるのです。

それでも敢えて、教会にはなお死者の葬りのために為すべきことがある、とわたしは申し上げたいのです。何となれば、キリスト教会は、「葬り」から始まっているからです。死者を正しく葬るとはどういうことなのか、ということから教会は始まったのです。

主イエスは、十字架の上で息を引き取られた日、二人の議員に遺体を引き取られ、真新しい墓に葬られました。それは、社会的に見れば十分に丁寧な葬りであったように思われます。そこには、幾人かの女の弟子たちも伴っていました。けれども、十二弟子らはいませんでした。彼ら弟子たちは、死んだ主イエスを葬ることができなかったのです。彼らは、「社会的に信用のある議員らの手で、真新しい墓に葬っていただいたのだから、十分じゃないか」とは思えなかったはずです。彼らには、主イエスの最後を見届けることが必要だったのです。何年も旅を共にし、生活を共にしてきた大切な方との別れを、彼ら自身が為す必要がありました。そうしなければ、彼らは、次の一步を踏み出せなかったでしょう。主イエスと共に歩んだ日々を、彼ら自身の人生の日々としてなお続けていくことが、できなかったでしょう。そうであればこそ、主イエスのご復活くださり、彼らの前に現れてくださったのです。

ご復活から昇天までの四十日は、弟子たちにとって、主イエスを「正しく葬ること」に充てられる日々だったに違いありません。そうしてこそ、彼らは、次の一步を踏み出せたのです。主イエスから受けたものを無に帰することなく受け継ぐ者として、自分の人生を続けることができたのです。

《生きた水》を注ぎ出す

今日は5月第二日曜日、いわゆる「母の日」です。わたしたちの命は、母親を通して受け継いだものです。母親との関係が良くても悪くても、そのことを否定することはできません。それを否定するならば、わたしたちは、自分の人生の始まりとしての命を否定することになってしまうでしょう。自分の人生の始まりの命を母親から受け継いだわたしたちは皆、その母親との関係を捨てて人生を生きることはできないのです。たとえその関係を断ち切ってきたとしても、そこに葛藤や破れが残っているならば、人生の歩みの中で繰り返されそれは蒸し返されてくるでしょう。

もちろん、わたしたちの人生は、生みの母親によってすべて決まるわけではありません。母親を含めた多くの人との出会いによって、わたしたちの人生は方向づけられ、道が拓かれてくるのです。出会いによって、わたしたちは、相手から多くのものを受け取ります。善いものも、悪いものも、受け取ります。意図して受け取るものもあれば、意図せず受け取ってしまうものもあるでしょう。だからこそ、わたしたちは、人生の歩みの中で誰と出会い、誰と歩みを共にするのか、ということを実感すべきなのです。自分の出会った人がどのような歩みをしてきた人なのか、誰と共に歩んできた人なのか。「そのようなことは関係なく、素のままのその人と向き合えばよい」と考える方もあるでしょう。もちろん、その人の素性や知られたくない過去を詮索する必要はないのです。けれども、わたしたち自身が、出会った相手に対して、自分は誰と出会ってきたのか、誰と共に歩んできたのか、ということを示すことはできるでしょう。そうすることによって、「わたしは、今出会ったあなたと共にこれからの人生を歩むことを望んでいる」ということを伝えることはできるのです。

主イエスは、「**渴いている人は、わたしのところに来て飲みなさい**」と言われました。ご自身の中に満たされた命、生きた水を注ぎ出して、ご自身が何者であるのかをお示しくださったのです。それが、神と出会い、神と共に歩まれた主イエスご自身の人生でした。主イエスは、出会われた者たちに、ご自身をお示しになられて、その歩みを共にするよう誘われたのです。神と出会い、神と共に歩む人生へと。その人の内にも同じ人生を紡ぎ出す命が生まれ、生きた水があふれ出るようになることを願ってくださったのです。

弟子たちがそのことを本当に理解し、知るようになったのは、主が天に上げられるのを見届けてからであったかもしれません。けれども遅すぎることはなかったでしょう。神と共に歩まれた主イエスの人生は、死によって全うされました。そのすべてを、弟子たちは、天に上げられる主イエスを見上げることを通して、受け継いだのです。